機械仕掛けの神はダイスを転がす

九曜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
機械仕掛けの神はダイスを転がす

【Ｎコード】
Ｎ９９５９Ｕ

【作者名】
九曜

【あらすじ】
そこはすべてが情報によって構築された剣と魔法の世界。その中で少年剣士として生きるシーナは、やがて踏破不可能と言われる地下迷宮『異界の門』へと挑むことを余儀なくされる。生きるため、そして、再びあの女と対峙するため、シーナは覚悟を決める――。
◆思いつきで書いたものです。更新は期待しないでください。

ｐｒｏｌｏｇｕｅ：万物は情報である

丘の上に樹齢数百年は経とうかという大樹があった。

彼――シーナは、そこにもたれて座っている。

顔を上げれば少し離れたところには城砦に囲まれた街が見えるのだが、しかし、シーナの目は宙に浮かんだ半透明のウィンドウに向けられていた。指は仮想コンソールの上を滑る。

この辺りは緑が豊かだ。

丘には一面に草が生えていて、定期的に色を変え、花を咲かせる。今この瞬間もやさしい自然の薫りに満ちていた。警戒心に欠けたリスがシーナのそばまでやってきて、彼と彼の見つめるウィンドウを交互に見ている。頭上の枝には小鳥が羽を休めているのだが、シーナは興味を示さない。

ふいに風が吹き――丘の草と、木の葉と、彼の前髪を揺らした。

――皮肉なもんだよな。

風を感じながらシーナは思う。

２２世紀の足音が聞こえてきた現代、世界は科学に覆われていた。急速に進歩した科学は、それまであった問題のほとんど解決してしまった。環境問題も、エネルギィ問題も。大国間の戦争ですら――ただし、それは新型の大量破壊兵器の開発というかたちで、だが。

そして、この世界はある意味で科学の究極の姿だ。

にも拘らず、科学が追いやった自然を生々しいまでに、まさしく五感で感じることができる。なんとも皮肉な話である。――だが、シーナはすぐにそんな感傷を意識から消し去った。

今、目の前のウィンドウに映し出されているのは、彼自身の装備データだ。

「防御力は上がったけど、その代償に重量負荷（エンカンブランス）の増加、か」

先ほど新調したばかりの防具と合わせて、総合的に見てみる。大きな不満はないが、気になるのは重量負荷（エンカンブランス）の増大だ。極端に増えたわけではないので、戦い方まで変わってくることはないだろうが……。

「理屈の上ではアレも使えるはずなんだけどな。それも含めて後は実戦で試してみるしかないか」

そう結論する。

――探索・”索敵”／自動発動／判定（ロール）……

と、そのとき、半透明のウィンドウの向こうに淡い光が目に入った。

「ちょうど湧いてきたな。よし」

シーナは好戦的な笑みを浮かべると、装備構築（アッセンブリ）を終了した。手を払ってすべてのウィンドウを消し、さらに掌を右から左に水平移動させて仮想コンソールも消した。

「武装化（データロード）」
立ち上がり、キィワードを口にする。
直後、シーナの体の中心から光の粒子が飛び散った。それは彼の周りで集まり、装甲板を形成して実体化すると、次々に体に装着されていく。
あっという間に肘から先と膝から下、胸部を鎧が覆った。
この世界ではありとあらゆるものが――人の体ですら、情報（データ）からできている。たいていのものは情報として格納でき、必要なときに実体化させて取り出せるのだ。
そして、彼の目の前のそれも、また同様だった。
シーナの武装化を確認すると、その淡い光は一瞬弾けてから再度集まり、ひとつのかたちを成した。大きな蝙蝠の羽を持ち、体は人型であってもどちらかと言えば獣に近い。この世界に無限に湧いて出ては跋扈する怪物（クリーチャー）の一種。
「悪魔像（ガーゴイル）か」
シーナは手の中に抜刀状態の刀を実体化させた。達人（マスター）の刀（カタナ）の名で知られる、稀少（レア）品とまではいかないが非製造品（アンコモン）の逸品だ。
――先制権決定（イニシアチブ・チェック）……
シーナは刀を構えただけで、先には動かず、まずは受けに回ることにした。
悪魔像が攻撃に移る。まずは猿のように疾駆。それから地を蹴り、

飛びかかってきた。鋭い爪が振り下ろされる。
シーナはそれを見極めると、なめらかな動きで体を横に滑らせ、ガーゴイルの後ろに回り込むようにして避けた。

が、

――かすった！？

肩に軽い衝撃。シーナは視覚に直接表示される、最小構成の基本情報をすぐさま確認した。確かに微小だがダメージが通っている。やはり増加した重量負荷が動きに影響しているようだ。

シーナを襲って外れた凶爪が大樹の幹をえぐった。

「おいおい。自然を大切に。……まぁ、時間が経てばもとに戻るけど」
イメージ通りの動きができなかった焦りが、シーナに軽口を叩かせる。

悪魔像は振り返ってシーナを認めると、そこでようやく己に翼があることを思い出したかのように舞い上がった。空から狙いを定める。地上ではシーナが刀を構えていた。

悪魔像が急降下し、シーナを強襲する。
対する彼は、今度は大きく後ろに飛び退って、それを避けた。

悪魔の爪はシーナの体にかすりもせず、大地に穿った。
悪魔像は続けて水平飛行へ移り、逃げた獲物へと追いすがる。シーナは両手で刀を持ち、上段に振り上げて待ち構えた。

――剣技・”十字連斬”／発動／判定（ロール）……

そして、タイミングを合わせて、刀を振り下ろす。
悪魔像が、上から下へと唐竹割りに断ち割られる。さらに刹那の間もなく、真一文字に斬り裂かれた。達人の刀を片手に持ち替え、間髪入れず横薙ぎに斬り払ったのだ。

高速の二連撃は空中に十字の剣閃を刻み、そこにいた悪魔像を４つに分断した。
有翼のクリーチャーはもとの光となって霧散した。

「致命的打撃（クリティカルヒット）か。……しまったな。これじゃ何の意味もない」

とは言え、敵がいなくなってしまったのだから仕方がない。シーナは武装を解除した。
達人の刀をデータ化して収納。続けて、各部の防具も再び光の粒子となってかたちを失うと、シーナの体の中に吸い込まれていった。

――探索・”聞き耳”／自動発動／判定……

そこで彼の耳は、丘の下から上がってくる軽い足音を拾った。見ればそちらには、まだ十代の半ばを過ぎたばかりと思しき少女がいた。

「お、いたいた。やっほー」

見知った顔だった。
シーナがここにきてから知り合った、アラシャと名乗る少女だった。金色の長い髪を黒いリボンでポニーテールにまとめ、お世辞にも起伏に富んでいるとは言い難い体を、黒のノースリーブのシャツと白のミニスカートで包んでいる。……尤も、本当に少女かどうか見た目では判断できないのだが。

「店の親父からシーナがいろいろ新調したって聞いてさ。たぶんここだろうと思った」
「別に。防具をちょっと変えてみただけさ」
「調子はＤｏ？」
唄うように問うてくる。

「どうだろうな」
シーナははぐらかすように笑うだけだった。

「ね、装備構築（アッセンブリ）画面見せてよ」
「ああ、いいよ」
言って彼は下に向けた掌を左から右へ動かした。その運動に合わせて仮想コンソールが出現。それを操作して目的のウィンドウを呼び出した。

アラシャはシーナの横に立って半透明のウィンドウを覗き見て――、
「ちょっとぉ。許可出しなさいよ。わっかんないでしょー」

基本的に己の情報はその本人にしか参照することができず、他人が見ようと思っても刻一刻と変化する無意味な文字と記号の羅列にしか見えないのだ。唯一回避する方法が、閲覧の許可を与えることだ。この場合、シーナがアラシャに許可を与えればいいのだが……。

「俺が見せると思うか？」
「ふーんだ。シーナって秘密主義だもんね」
「そういうこと」
アラシャの予想通りの反応に、シーナは笑みを浮かべた。

「さて、そろそろ街に戻って、今日は上がるとするか」
「なに、もう終わり？　まだまだこれからじゃない」
アラシャは不満の声を上げる。当然、シーナにつき合って帰還する必要などなく、ただ単に彼の新しい装備が見たいだけなのだろう。
「この辺で上がっとかないと、明日がキツいんだよ。新しい装備での調子が見られなかったのは残念だけど、まぁ、そんなのはいつでもできるしな」
しかし、シーナはそんなアラシャの言葉には耳を貸さず、街のほうに体を向けて――そこで動きを止めた。

そこに男がひとり、立っていたのだ。

「それはいいことを聞いた」
体は細いがシーナより頭ひとつ分は高いであろう上背。亜麻色の髪はやや長めで、意外に整った顔はどこか貴族的ですらある。長身の美丈夫だ。

「ラセツ……」
それが男の名だった。
「アラシャ。お前、つけられてたな」
「……」
そのアラシャは、ただラセツを睨む。男の質の悪い行動と、それに気がつかなかった自分が腹立たしいのだ。

「わざわざ気配を消して近寄ってくるなんて、人が悪いんじゃないか？」
「なぁに、かわいい冗談だ。笑って許せよ」
と、勝手な言い草のラセツ。

シーナとラセツはそれなりに旧知の仲だった。と同時に、反りの合わない間柄でもあった。おかげでラセツは、表面的には友好的な態度を装いつつも、そこに陰険なものを含ませ、シーナはシーナで関わり合いになることを避けながらも、会えばついつい喧嘩腰になってしまっていた。

「で、いいことを聞いたってなんだよ」
「いや、なに、私もいくつか装備を変えたところなんだが、まだ調子を試していないんだ。丁度いい。模擬戦といこうじゃないか」
「模擬戦だって？」
シーナはラセツの言葉を復唱しながら、その意図を測る。

たぶん本当に額面通りの目的もあるのだろうが、それ以上にシーナを叩きのめしたいという思いがあるに違いない。これはその口実なのだ。

「……ああ、いいよ」
少し考え、シーナはその申し出に受けて立つ。なぜなら彼もラセツに対して常々同じ思いを抱いているからだ。

「いいの？」
アラシャが横から口を挟む。
「いいさ。別に決闘方式で死ぬまでやろうってんじゃないんだろう？」

「そうだな。私も命は惜しい」
それを受けて、ラセツは苦笑しながら答えた。
「なら決まりだな。……下がってろ」

だからと言って、稽古でもするような甘い模擬戦をする気は毛頭ない。己の実力を思い知らせて勝つつもりだ。

「武装化（データロード）」
意思とキィワードによる装備の実体化。瞬く間に防具がそれぞれの体を覆う。

シーナは当然、先ほど悪魔像（ガーゴイル）と戦ったときと同じ姿だ。
一方のラセツは全身鎧（フルプレート）だった。重量負荷（エンカンブランス）を極力抑えるために軽量にしているシーナの装備に対して、ラセツのそれは全身をくまなく覆っている。
中でも異彩を放っているのはその腕部装甲の大きさだった。シーナが以前に見たときよりもひと回りほど大きくなっている。

この世界では、防具の防御力は見た目の面積や厚さに依存しない。コンパクトでも高い防御力を設定された装甲などいくらでもある。にも拘らず、あのようなサイズになっているのは特殊能力と高い防御力を併存させて、情報量が膨らんでいるからだろう。――シーナはそう踏む。

――もとから重戦士（ヘビィウォーリアー）だったが、また一段とそっちに特化したか。

貴族的な面立ちに無骨な全身鎧。しかも、腕だけが不釣り合いに大きい。どこまでもアンバランスな男だった。

シーナは全身から放たれる威圧感を感じながら達人（マスター・カタナ）の刀を呼び出

す。対してラセツが取り出したのは、長大な長柄戦斧（ハルバード）だった。それを両の巨腕で握りしめる。
ふたりはそれぞれの武器を構え、睨み合った。

――先制権決定（イニシアチブ・チェック）……

先に動いたのはシーナだった。
先に一撃喰らわせ、以後の展開を有利に運びたかった。幸いシーナのほうが敏捷性に優れ、一気に懐に飛び込める――はずだった。
ラセツもシーナに半瞬遅れて動き出す。が、その動きが尋常ではなかった。見た目に反しておそろしく俊敏。シーナは、自分がイメージしていたよりも早く敵と相対してしまい、それ故に反応が遅れてしまった。

「ぬぅん！」
長柄戦斧が軽々と振られる。
予想外のラセツの動きに驚愕していたシーナは、それを受けることもかわすこともできなかった。
「がっ」
脇腹に横薙ぎの一撃を受け、体がくの字に折れた挙句、面白いように吹き飛ばされた。

「シーナ！」
アラシャの口から悲鳴が上がる。

「ふむ。なかなかいいではないか」
ラセツが満足げにうなずいた。それは己の動き云々にというより

も、吹き飛ばされたシーナの姿に愉悦を感じているように見えた。

シーナがよろよろと立ち上がる。

長柄戦斧の一撃を受けた脇腹に痛みが留まっている。それだけ強烈だったということだ。

「さすがに一撃では倒れんか」

「舐めるなよ、ラセツ」

言い返しながら理解する。

――あの腕、”剛腕”が常時付加（エンチャント）されてるのか……？

長柄戦斧は、非製造品（アンコモン）である達人の刀と違い、店に行けばいくらでも買える製造品（コモン）の武器だ。だが、”剛腕”をもって振れば、威力だけなら希少品（レア）の武器にも匹敵するかもしれない。

――探索・”気配感知”／自動発動／判定（ロール）……

ふとシーナは、ラセツでもなくアラシャのものでもない、別の誰かの気配を感じた気がした。

目だけを動かし、辺りを窺う。

――気のせい、か……？

だが、少なくとも見える範囲に姿はなく、その気配も今はもう感じなくなっていた。

「こんなときに余所見か。余裕だなッ」

ラセツの声にシーナは我に返る。意識をよそに向けたその隙を逃さず、重戦士が迫ってきていた。

さすがに一度見ているだけあって、まったく体が反応しないということはなかった。突進力を活かしたラセツの攻撃を、シーナは刀で受ける。

「くっ」

強烈な衝撃。

両足で大地を踏みしめているにもかかわらず、少なからず押し動かされた。達人の刀が長柄戦斧よりも希少性と情報量で勝っているため、武器破壊（ウェポンブレイク）されないのが幸いか。

「ふっ」

長柄戦斧を押し返し、呼気とともに刀で斬り上げる。

だが、ラセツは素早く後退。剣閃は空を切った。

「ちっ」

シーナは舌打ちする。

重戦士による重兵器の一撃はすさまじい衝撃を生み、防御から攻撃に転ずるのにどうしてもワンテンポ遅れてしまう。だから逃げられるのだ。

「……」

「……」

無言で間合いをはかるふたり。

だが、その表情は対照的だった。シーナが攻めあぐねたように苦い顔をしているのに対し、ラセツはこの一方的な展開に嗜虐的な笑

みを浮かべている。

――どうする？　どこから切り崩す？

思案するシーナ。

そのときだった。

突如、体の表面に光とともに何かが着弾し、シーナはその勢いで吹き飛ばされた。何が起こったのかわからなかったが、わからないままに地面を叩き、二度三度回転した後、腰を落とした姿勢で着地する。

「なんだ……！？」

それは斜め上から飛んできたようだった。シーナはそちらに目を向け――見つけた。大樹の上に男がひとり。鎧は身に着けず、弓だけを構えている。どうやらいつの間にか現れた伏兵に狙撃されたらしい。

「ラセツ、これはどういうことだ！？」

シーナは叫んだ。

今さらながらに気づく。先ほど感じた気配は、あの男のものだったのだ。

「何のことかな？」

とぼけたように、しかし、口許に笑みを浮かべつつ受け答えるラセツ。

「一対一じゃなかったのか！？」

「ふむ。そんなことを言った覚えはないがな」

「お前……」

樹上ではすでに狩人が弓に次の矢をつがえていた。第二射が放たれようとしている。空対地の位置関係と距離、追尾性能を考えればほぼ狙い撃ちだ。

「ラセツ。汚いやつ」

そこに金色の長い髪をなびかせ、走ってきたのはアラシャだった。声が鋭く冷たくなっているのは、戦闘になったときの彼女の癖だ。

「武装化（データロード）」

その声に呼応して現れた光の粒子は、機械的なデザインのローブとなって実体化し、彼女の華奢な体を包んだ。

アラシャが割って入るのと、矢が放たれるのとがほぼ同時だった。

――弓技・”魔弾”／発動／判定……

――魔法・”防御壁”／対抗発動／判定……

突き出したアラシャの手には実体化した短杖（ワンド）が握られていた。その先端を中心に魔方陣が空中に描かれる。

この世界では魔法は魔方陣によって表現される。その完成と同時に魔法が発動するのだ。

ただし、魔方陣はそこに含まれる情報量に比例して文様が複雑になり、描画――即ち発動に時間がかかるようになる。従って、高威力でも単体攻撃魔法はそれだけなら比較的単純で、効果範囲や追加効果などのほうが情報を複雑化させる要因である。

シーナを襲った狩人の第二射は、アラシャの対質量障壁の魔法によって弾かれた。

「私を忘れてもらっては困るな」

ラセツだった。

重戦士が迫ってくる。

「アラシャ」

「まかせて」

シーナとアラシャは、背中合わせに声をかけ合った。

アラシャは、今度は腰を落として指先で地面に触れた。

――魔法・”炎塔”／発動／判定……

アラシャの前方、大樹を中心に描かれるのは、先ほどのものとはまた違った文様の魔方陣。完成と同時に吹き出した火柱は、瞬く間に樹を覆い尽くした。

「ッ！？」

堪らず男が大樹から飛び出してくる。

「自然は大切にしろって。だけどよくやった、アラシャ」

一方のシーナは、

――剣技・”十字連斬”／発動／判定……

先の悪魔像（ガーゴイル）戦で繰り出した、縦と横の二連撃をラセツへと放つ。タイミングはやや早い。

「ぬうっ」

だが、空中に刻まれた十字の剣閃は、突進してくるラセツを牽制し、足を止めさせた。

そして、シーナは転進。

狙いは炎に包まれる大樹から飛び降りてきたばかりの狩人の男だった。

「っ！？」

慌てて逃げようとする男。

だが、

「遅いな」

シーナはその間を与えず、容赦なく刀を振り下ろした。一撃のもとに斬り伏せる。

「そのまま寝てろ」

さて――と、ラセツへと向き直った。

「使えないやつだ」

そのラセツは仲間であろう男を見やり、冷たく吐き捨てる。

アラシャがシーナの横に並んで立った。

「なんだったら、このまま加勢するけど？」

「いや、いい。後はひとりでやる」

しかし、シーナはそれを手で制し、彼女を下がらせた。

「ラセツ、次で終わりにするぞ」
「さて、どんな終わり方になるかな」
「……」

ラセツの挑発するような言葉を無視して、シーナが呼び出したのは達人の刀の鞘だった。そこに刀身を納める。
その行動にラセツは、わずかに怪訝な表情を見せた。

「……いくぞ」
「わざわざやられに向かってくるかッ」
納刀状態の達人の刀を握って駆け出すシーナと、迎え撃とうと待ち構えるラセツ。

――体術・”踏み込み”／発動／判定・成功
――技巧・”早業”／連動発動／判定・成功
――達人の刀（マスター・カタナ）・”抜刀”／連動発動／判定・成功

――スキル連動・成功！

一瞬にして間合いを詰めたシーナは、大地を踏みしめて制動。続けて、地よ砕けよとばかりに踏み込みながら達人の刀を抜き放った。その手の動きは、幻と消えるほどに神速――。
対するラセツは、間合いに飛び込んできたシーナの動きを見極め、その刀よりも一瞬でも先にと長柄戦斧を渾身の力で振り下ろす。

――”居合い”／発動／判定……

だが、その動きが途中で止まった。
確かにラセツの目は状況を正確に見極めていた。正確であるが故にシーナのほうが迅いと悟ってしまったのだ。このままではシーナの刀のほうが先に到達し、己を斬る。

「ええいっ」
ラセツは攻撃から一転、後退に切り替――いや、それでも間に合わない。上体を反らす。

逆袈裟に斬り上げるシーナの達人の刀。

その間合いを外そうと、上半身を仰け反らせるラセツ。

かくして――、
シーナの刀は空を切った。切っ先はラセツの鼻先をかすめ、亜麻色の髪を数本散らしただけにとどまった。

シーナとラセツは、まるで刻が止まったかのように、そのままの状態で動きを止めた。
その奇妙な静寂の中で、最初に動いたのはラセツだった。口許を歪ませ、笑みを浮かべる。今のシーナは長柄戦斧の間合いの内だ。いかに早く動こうとも、間合いを脱する前に必殺の一撃を叩き込める。

「何を笑ってる、ラセツ」
「ッ！？」
「居合いをよけるなら、あと3歩は多く見ておくんだな」

高速で振られる居合いの斬撃は、風を斬り裂き、不可視の刃となって間合いを3歩遠くする。

直後、ゆっくりと空中に剣閃が刻まれはじめた。下から斜めに上へ。居合いの軌跡を寸分違わずトレースし――避けたはずのラセツのその巨躯にも刻み込む。

「ぬ、おおおっ！」

ダメージは重装甲の全身鎧を抜けた。耐え切れずラセツが膝をつく。

この模擬戦はシーナの勝利だった。

シーナとアラシャは、あの丘から見えた城塞都市の通りを歩いていた。

街は中世ヨーロッパをモチーフにデザインされた風で、石やレンガ造りの建造物が多く、ふたりが歩く街路もまた石畳だった。規模も比較的大きく、活気にあふれている。

ふたりは特に行くあてがあるわけでもなく、中央の大通りをぶらぶらしながら言葉を交わす。

「シーナってば、いつの間にあんな技できるようになったのよ？」

「ああ、あれ？　ついこの間。さっき初めて使った」

シーナはさらりとそう答える。

「ハァ、何それ？　じゃあ、ラセツにやったのってぶっつけ本番？」

「そうなるな」

「あっきれた……」
アラシャは深々とため息を吐いた。
「別にいいだろ。うまくいったんだから。……さて、それじゃあ、俺はもう上がるよ」
シーナは立ち止まり、掌を水平に動かして仮想コンソールを呼び出した。
「ね、ねぇ。今度わたしと組まない？」
「ん？　そうだな。まぁ、考えとくよ」
曖昧な返事を返す。
指でコンソールを叩き、目的のウィンドウを開いた。

＞”エンゲルスマネーヴァ”からログアウトしますか？
＞Ｙｅｓ／Ｎｏ

半透明のウィンドウの向こうでアラシャが小さく手を振るのを見ながら、シーナは仮想大規模オンラインゲーム（VRMMO）の世界から現実へと戻るべく、迷わず『Ｙｅｓ』を選択した。

1．境界線へ

全感覚接続型仮想現実／

２０年ほど前に発表された最新の仮想現実（ヴァーチャルリアリティ）の技術。

かつてはコンピュータ・グラフィクスなどによって仮想の世界がユーザーに提供されていたが、この技術では視覚、聴覚、触角など全感覚に同時並行で擬似信号による情報を送り、処理をすることができる。結果、ユーザーはあたかも別の世界にいるような感覚、まさに言葉通りの仮想現実を体験できる。

エンゲルスマネーヴァ／

通称《ＥＭ》。

５年前にシステム＝ロゼッタによって全感覚接続型仮想現実が本格的に実用化され、それと同時に同社のゲーム開発部門から発表された世界初の仮想大規模オンラインゲーム（ＶＲＭＭＯ）。

プレイヤは前述の技術を利用して剣と魔法の世界の住人となり、様々に遊ぶことができる。

基本的には経験値を積んでレベルアップし、ポイントの消費でスキルを覚えるというオーソドックスなゲームシステムである。しかしながら、初のＶＲＭＭＯゲームであることとその遊びやすさから、日々新しいゲームが発表される今でも世界で最大のプレイヤ数を誇る。

社会的には一介の高校生である椎菜は、放課後、電気自動車の行

き交う道路を横目に見ながら、クラスメイトたちとともに駅に向かって歩いていた。

アスファルトに代わる新素材は強度と耐久性に優れてはいるが、全体的に色が薄く、且つ、変色もしにくいため、白くのっぺりとした道がずっと続いているように見える。歩道や中央分離帯に立ち並ぶ街路樹がどれもこれも同じに映るのは、遺伝子操作で大量生産されたものだからだ。CO2対策に光合成の力が非常に強くなっているのだ。

ひと昔前の人間が見れば、なんとも無機質な街並みに見えることだろう。だが、今はこれがスタンダードであり、高校生の少年少女にとっては生まれたときからの風景。疑問を差し挟む余地もない。今では先進国の都市部で天然自然を見ることはほとんどなくなっている。

人間はあらかた地球に手を加え尽くした。それだけでは飽き足らず、VR空間（バーチャルスペース）まで作り出し、知的労働の活動範囲を無限にまで広げつつあるのだ。

「おーい、椎菜っち、聞いてるー？」

自分の名前に反応し、椎菜は携帯端末から顔を上げた。線の細い、幼い面立ちだ。

「え？　ごめん。聞いてなかった」

「悪びれもせず言うかよ」

「これからどっか寄って帰ろうぜって話」

ガードレールの向こうの路側帯で燃料電池（セル）バイクを押している別の友人がつけ加えた。その後ろにはバイクの後部に腰かけてひとり

楽をしている女の子がいるが、先の少年のカノジョなので、まぁ、よしとする。

「残念。用事ができた。今」

「さては今見てた携帯(それ)端末に関係あるな。ラブレター？」

「違うって」

苦笑する椎菜の前方にリニアの駅と、その左右に延びる高架線路が見えてきた。友人たちが遊んで帰るというなら、この駅の周辺だろう。椎菜はここからリニアだ。

「じゃ、これで。また今度つき合うよ」

「おう、またな」

互いに手を振り合って別れる。

椎菜は、ゲートをくぐって駅の構内に入ると、さらにエスカレータでプラットホームに上がった。磁気浮上式で文字通り滑り込んできたリニアに乗り込む。中はほどほどに混んでいて、空いている席を探すのも面倒なので、そのまま立っていることにした。どうせ１０分かそこらだ。

閉じたドアにもたれて立ち、携帯端末に映し出すのは先ほどまで見ていたメールだ。

『調子はＤｏ？』

そんな冒頭ではじまるメールの差出人は、アラシャ。

アラシャとはＶＲＭＭＯゲーム『エンゲルスマネーヴァ』――通称ＥＭ、の中で知り合った仲だが、こうして現実世界でも時々メー

ルのやり取りをしている。尤も、顔も素性も知らず、ＥＭの中と同じように本当に少女なのかも知らない。こういう時間にメールを送ってくる辺り、自分と同じ学生なのだろうかと想像するだけ。とは言え、ハンドルネームしか知らない相手とのメールなど、インターネット時代からよくあったことではある。

アラシャからのメールは、一緒にクリーチャー狩りをしようというものだった。

未だに下位クラスのアラシャは上位クラスへのクラスチェンジを目指して、効率よく経験値を稼ぎたいのだ。椎菜も下位クラスだから気持ちはわかる。だが、残念ながら椎菜は基本的にパーティを組まない、ソロ狩りをプレイスタイルとしていて、今のところこの手のお誘いに首を縦に振る気はなかった。それを知った上でアラシャは度々誘ってくるのだから、これはこれでラブレターと言えるのかもしれない。

『Ｐ．Ｓ．　この前、村正（ムラマサ）見たよ。ＭＵＲＡＳＡＭＡ　ＢＬＡＤＥ！』

最後の一文に軽く噴き出す。

椎菜はさっそくメールのリプライを書きはじめた。

打鍵しつつ思う。ＥＭの中みたいに仮想コンソールがあれば便利なのに、と。だが、現実はそこまでの技術は確立されていない。約２０年前のあるときを境に仮想現実（バーチャルリアリティ）の技術は飛躍的に発達した。それこそ無限の空間をつくり、ついには人間がそこに飛び込んでしまえるほどに。それでも現実では、多機能携帯端末が発達し、ひとり一台と言われるほど普及したにとどまっている。

最近ではＶＲ空間でのスクーリングという構想もあるようだ。今

世紀初頭のテレビ会議やネット講習とは違い、それぞれが現身（アバター）となってひとところに集まり、生徒同士の交流だってもてる。十分に学校として成立しているだろう。

ＶＲＭＭＯゲームにハマったりもする椎菜だが、それでも現実世界の学校を支持していた。

例え、現実だろうが仮想現実だろうが、学校として本質的な意味に相違がなくても、己の体で人と交流を持つことに大きな意味があると思ってるのだ。第一、今日は断ったが、仮想現実では学校帰りに友人と遊びに行ったりはできない。

程なくリプライを書き終え、送信した。また今度時間があれば、とお茶を濁した内容だ。

程なく駅に着き、リニアを降りる。ゲートをくぐって外へ。陽の光を浴びた丁度そのとき、手に持ったままだった携帯端末が短い小さなアラームを鳴らした。ＬＥＤを見ればメール着信のサイン。

駅前のロータリィを歩きながら端末を片手で操作する。メールの差出人はまたしてもアラシャだった。もうリプライを送り返してきたらしい。暇か、あいつは。椎菜は苦笑した。

大きな交差点で信号待ちをしながら、メールを読む。

駅前のスクランブル交差点だけあって、人も交通量も多い。友達同士おしゃべりをしている学生や、苛立たしげに信号が変わるのを今か今かと待っているフリータっぽい青年。椎菜のように携帯端末を覗き込んでいるものを見ただけでも、その様子は様々だ。気ままに趣味の情報を検索しているものもいれば、目を通しておきたい書類かメールでもあるのか、一分一秒も惜しい様子のサラリーマンもいる。

椎菜はメールを読みながら、視界の隅で信号が青に変わったのを認めた。携帯端末に目を落としたまま、足を前に踏み出し――その瞬間だった。

「危ないっ」

「え？」

顔を上げ、前を見る。

信号は間違いなく、青。

右を見る。

そこに少し大きめのファミリィカーが迫ってきていた。けたたましいクラクションの音が耳を乱打する。

避け切れない。

一瞬でそう判断できた。

おいおい、信号は赤だろ。ちゃんと見ろって。あ、でも、確認もせずに渡ろうとした、こっちも悪いのか。

思わず引きつったような苦笑い。

直後。

体を衝撃が襲った。

まるで濁流の中の木の葉のように、めちゃくちゃに痛めつけられる。

それが過ぎると、わずかな静寂が訪れた。

「撥ねられたぞ！」

「救急車だ！　救急車を呼べ！」

一転して騒然となる周囲の様子を、椎菜は力の入らない体で耳だけで聞いていた。

「お、おい。今、青だったよな……？　そいつが赤で渡ろうとしたんだよな……！」

「知るか、そんなのは後にしろ！　誰かそのバカが車載カメラ壊さないよう見張っとけ！」

そんな怒鳴り声を聞いたところで、椎菜の意識は途切れた……。

次に認識できたのは、うっすらと開けた目に飛び込んできた強い光だった。

続いて、声。

「出血止まりません。バイタル低下してます」

「除細動準備！」

ああ、そういうことか――理解して、また意識は闇へと落ちた……。

2. Link

いったいどれくらいの時間が経ったのか、すでに認識の範囲外だった。

自分はどうなったのだろう？

こうして考えることができているということは、助かったということか？

いや、

果たして思考は生者の特権なのだろうか？　死者は考えない？

と、そのとき、聞きなれた声を聞いた。

『感覚接続を開始します』

それは『エンゲルスマネーヴァ』に飛び込むときにいつも聞いているガイダンスの音声だった。

なぜこんなときに？

『視覚の接続を行ないます。――成功（クリア）』

もともと何も見えていなかったが、目だけが遠くへ行ってしまい、そこの景色を映しているような、そんな感覚。だが、それでもまだ何も見えてはこない。

『聴覚の接続を行ないます。――成功』

同じように、耳がここではない別の世界の音を拾いはじめたような感覚に陥る。

本来ならここでメディカルチェックが走る。極端に脈拍が速かったり、体温が高かったりすると接続が中断されるのだ。精神面と健康面の安全を考えての措置らしい。
今の自分ならどうなのだろう？
感覚の接続は今も順々に続いている。

『全感覚の接続を完了しました』

正常にクリアしたようだ。

『開放します』

瞬間。
すべての感覚が自分のもとに戻ってきた。

そこは何もない空間だった。何もない空間に椎菜は漂っている。おそらく天と地の概念もないから『立つ』という状態も定義できないのだろう。宇宙空間を漂えばこんな感じだろうかと想像する。

自分を見た。
着ているのは椎菜が現実世界で持っている服ではなく、ＥＭ内の現身（アバター）が普段着ているものだ。ここはＥＭの中で、今の自分はシーナなのだろう。きっと顔もどこか現実世界の自分に似た、線の細い少年のものに違いない。ならばシーナとして振舞うべきか。

「お呼び立てして、申し訳ありません」
不意に、前触れもなく女が現れた。

女性ピアニストのようなモノトーンのドレス姿。正面から見てい

るので正確には把握できないが、黒髪は腰まで届くほど長いようだ。年はわからない。妖艶な雰囲気が彼女を年齢不詳にさせていた。

特筆すべきは、その女はシーナから見て上下反対になっていることだ。だが、天地の概念のない空間で人と向きを合わせることに意味を見出せないのか、彼女はそれを気にした様子もなかった。

誰だ、と思ったのは一瞬。すぐにシーナは女の正体に――おそらく、気づいた。

「突然ですが、あなた方には私の実験に協力してもらいます」

高圧的になるでもなく、かと言って丁寧に頼むわけでもなく、女は淡々と述べる。

「実験？」

「とは言っても、難しいものではありません。あなた方が普段この仮想世界の中でやっていることと同じです」

「……」

理解は未だ半分にも満たない。シーナは黙って続きを待った。

「ひとつ目標を設定しました。この近くに『異界の門』と呼ばれる場所があるそうですね。システム＝ロゼッタの担当者から聞きました。名前のセンスは理解し難いですが」

女は微苦笑する。

『異界の門』。

聞いたことのある名称だった。たいていはあまりよくない話ばかり付随しているが。

「あなた方にはそこを踏破してもらいます」

「……」
言葉を失う。
あそこはいわくつきの地下迷宮だ。去年の大型アップデートの際に追加されたが、未だに最深部に到達したパーティがいるとは聞いたことがない。特に目立ったイベントも見当たらないため、今では挑戦するプレイヤも少ない。そんなところを突破しろというのか。
しかし、次に女が発した言葉の内容は、それと比べものにならないくらい恐るべきものだった。
「その目標の達成をって実験終了とし、あなたを解放します」
「ま、待て。何だって！？」
シーナは思わず声を荒らげ、問い返していた。
対して女は、言葉通りに先の台詞を繰り返すような真似はしなかった。
「実験に必要な環境です。あなたは私が設定した目標を達成するまで、この仮想世界より出ることはできません。つけ加えるなら、ここでの死は現実での死に相当します」
「はったりだ！」
断定の口調で言い放つ。
「いいえ。現状、あなたは五感と、脳から信号を送るための神経回路をシステムに掌握されている状態です。それだけあればこの仮想世界の死と連動して何らかの刺激を与え、現実の死をもたらすには十分です」
「……」
ＥＭのプレイヤに限らず全感覚接続型仮想現実の利用者はその性

質上、神経系のほとんどを装置を介してＶＲ空間にリンクさせた状態にある。彼女の言ったようなことも十分可能だ。

「多くの生命にとって死は不可避です。あなたがここに生きている以上、死の概念がないことはむしろ不自然と言えます」

「ふざけるな！　死と隣り合わせでやれっていうのか！？」

「理解しましたか？」

その通りだと彼女は言っていた。

「嘘だろ……」

シーナは掌で顔を覆い、考え込む。プレイヤをＥＭの中に閉じ込め、命がけのゲームをさせる。――それが実験……？

「言っておきますが、心理学的な実験ではありません。そのような低い次元の話をするつもりはありません」

またシーナを先回りする。

今、彼女は『低い次元』と表現したが、それは心理学を見下しているわけではない。自分が行なう実験が単純なものではなく、もっと複雑で高次のものであると言っているのだ。

「じゃあ、いったいどんな実験を？」

「残念ながら、私はそれを説明する言葉を持っていません。昔から自分の研究を人に説明してこなかったものですから。それに言ったところで理解はできないでしょう」

「……ひとつ訊きたい」

「どうぞ」

女は先を促した。

その前にシーナは体の上下を彼女に合わせた。どうにも話しにくかったのだ。何もない、ただ漂うだけの空間で、彼はくるりと半回転する。一瞬、自分も相手も、そろって天井からぶら下がっているような感覚に陥ったが、すぐに最適化され、正しく立った状態になった。

女はシーナのその運動が自分の発想の範囲外だったのか、楽しげに少女のような微笑を浮かべた。

「現実の俺は、たぶん死にかけているはずだ」

「……」

しかし、その女の表情が不意に消えた。

「その通りです。現実のあなたはＩＣＵで治療の最中です。命が助かったとしても、意識が戻る確率は非常に低いと判断されています」

「その俺にＶＲアクセスユニットをかぶせたのか？」

ＶＲアクセスユニットとは、ＶＲ空間に感覚を接続するための装置だ。フルフェイスヘルメットと軍用の暗視ゴーグルを組み合わせたような形状をしている。

「その通りですが、正確ではありません。生命維持に必要な医療機器に偽装して、アクセスユニットと同様の機能を備えた装置をつけさせてもらっています」

「ずいぶんと小型で、かたちも違うんだな」

「むしろ私からすれば、どうして現行機のような大きさになるのか不思議です」

話すうちに彼女の表情が戻ってきた。

シーナは頭を整理する。

重体となり、昏睡した意識。もしかしたらそのまま回復しないか

もしれないその意識をつかまえ、仮想現実へと繋ぎとめる。これは興味深くも、背徳的な技術なのではないだろうか。

魂という概念の立証。
ある種の不死性。

ぞっとする。これは、危険だ――。

「そういう意味では、あなたの状況は好都合でした」
「どうせ死にかけているのだから、実験とやらに協力しろと？　そのまま本当に死ぬかもしれないけどな」
シーナは悔しまぎれに鼻で笑ってみせた。

「そのときは仕方がありません。サンプルは他にもありますので。……話を戻しましょう。あなたは私が設定した目標を達成すべく努力してくれればけっこうです。私はそれを研究の材料とします。あなたが無事現実に戻った暁には、協力の謝礼として望むものは可能な限り提供すると約束しましょう」

しかし、そんな憎まれ口も涼風ほどに女を揺らさなかった。どうやら人の命を単なる実験道具としか思わない思考は筋金入りらしい。

「きっとそのときがきたら、命を差し出せって言うと思うよ」
シーナは吐き捨てるように言った。
「かまいません。あなたがそれを望むなら」
「……」
意外な返答に驚いて、シーナは女の顔を見つめる。彼女は少し悲しげな色の微笑を浮かべているように見えた。
「もとより私が手がけている研究は体が朽ちるまでには終わらない

と思っていましたし、いずれは仮想現実へ移るつもりでいましたから。その準備もほぼ終えています」

つまり遅かれ早かれ体は捨てるつもりだったということか。

意識は今のシーナのように繋ぎとめることができる。ならば後は、体を永遠に保存するか意識を完全に体と切り離してしまうか。これは言うなれば生命のデータ化に他ならない。そんなことができるのだろうか？　いや、やるのだろうな、この人なら。シーナは妙に納得してしまった。

「仮想現実の技術が成熟し切れば、現実との境界は限りなく曖昧になっていくでしょう。果たして、そうなったとき自分がいるこの世界が仮想現実ではない、もしくは、そうであると誰が明確に証明できるでしょうか。それならば、どちらに存在をおこうと本質的に大きな差はないのではありませんか？」

女はそこで苦笑をひとつはさんだ。

「今のあなたには関係のない話でしたね。……では、ごきげんよう。次は現実で会えることを楽しみにしています」

楽しみに、と言った言葉のわりには彼女は淡々と述べ、闇に溶け込むように消えた。

「……」

何もないこの空間にひとり取り残され、戸惑ったのも束の間、すぐにシーナにも異変が現れた。それはＥＭの中で転移の魔法を使ったときにも似ていて、上下左右に激しくうねる光の河を流されるような感覚だった。

3．囚われ人たちの狂宴

「くっ……」

シーナは片膝をついた。

急に浴びせかけられた光に目が眩んだのか、いきなり定義された重力に対応できなかったのか。いや、その両方か。

ゆっくりと立ち上がった。床がある。辺りを見回せば、ベッドや家具などの調度品、果てはアームチェアまであり、窓からは陽の光が燦々と差し込んでいた。シーナがＥＭの中でよく利用する一晩の宿のための部屋よりも、ひと回りもふた回りも立派だ。むしろ住居に近い。

「どこだ、ここは」

少なくともこの部屋は初めて見る場所だ。

「そ、そうだ……！」

あることを思い出し、彼は水平にした掌を、左から右へとスライドさせた。動作に伴って仮想コンソールが姿を現す。それを操作し、ゲームの基本メニューを呼び出した。

「……ない。くそ……」

眼前に浮かぶ半透明のウィンドウを見て舌打ちをする。そこにあるはずのロクアウトボタンがなかったのだ。――脱出不能。

頭を切り換えろ。

シーナは自分に言い聞かせた。

あの女が冗談を言う性質ではないことは予想がついていたはずだ。やると言えばやるし、やったと言えばすでにやった後なのだ。それに、確かに正規の方法でのログアウトはできなようにされているが、探せばもっと別の手段があるかもしれない。だが、それを模索するのはもっと冷静になってからだ。今はまず状況の把握が先だ。

部屋の外へ出てみる。

そこは絨毯の敷かれた広い廊下で、ドアが立ち並ぶ光景は大きな洋館を連想させた。ドアはどれもこれも閉じられていて、わざわざ開けてみる気にもならず――歩いているうちに下へと続く階段に差しかかったので、試しに階下に降りてみることにした。

下のフロアもやはり洋館然とした廊下が延びていて――、

――探索・”聞き耳”／自動発動／判定（ロール）……

かすかに人の声が聞こえた。話し声や、怒声とも奇声ともつかない叫び声。くぐもって聞こえるのは単に遠いだけでなく、扉ひとつ隔てているからか。シーナは声の聞こえるほうへ歩を進め、程のなくひとつのドアに当たりをつけた。

――隠密行動・”忍び足”／発動／判定……

足音を忍ばせて慎重に近寄り、何を話しているか声を拾おうと試みる。

が、

「ッ！？」
いきなり勢いよくドアが開いた。驚いたシーナの動きが止まる。
ドアを開けたのは、赤い髪に赤い服の女だった。おそらくクラスは盗賊（シーフ）。彼女はシーナの接近を鋭く察知し、不意をつくタイミングで狙って開けたに違いない。
女は観察するような目でシーナを見る。
「シーナ！？」
その声は赤い女のものではなく、そのもっと奥にいた金髪を長いポニーテールにした少女――アラシャのものだった。
「シーナもつれてこられてたの！？」
「そうらしいな」
答えながら部屋の中を見回す。
中央に軽く２０人は座れそうなテーブルの置かれた大広間だった。そこにやはり２０人ほどの男女。
まずはテーブルを見る。
「どうするんだよっ。誰か考えろよっ。何かあんだろうがよっ！？」
「怒鳴ってばかりいないで、そっちこそ少しは考えたらどうなんだ。ええっ！？」
イスから腰を浮かせ、卓を叩かんばかりの勢いで怒鳴り合っているものがいる。
その横では悲愴な表情で頭を抱えているものや、神妙な顔で腕を組んで考え込んでいるものもいた。誰も彼も、その顔は一様に暗い。

その中に貴族顔をした美丈夫、ラセツの姿を見つけ、シーナは顔をしかめた。

「くっそぉ！　壊してやる！　壊してやる！　ぜんぶ壊してここから出るんだ！」

壁際に目を向けると、半狂乱になってイスを振り回しているものがいた。持ち上げたイスで壁や花の生けられた花瓶をやたらめったら殴りつけているが、そのどれにも『破壊できないオブジェクトです』の表示が出っ放しだ。花瓶がイスを弾き返している光景は少々滑稽ですらある。

皆が皆、大なり小なり冷静さを失っている。

なるほど――と、シーナは理解した。

「ここにいる全員が運命共同体ということか」

先の女が『あなた方』といっていたから自分以外にもいるとは思っていた。

「俺も仲間さ」

赤い女にそう言って、脇を抜ける。さらにアラシャの肩を軽くぽんと叩いてから、向かった先はラセツのところだった。

「おい、ラセツ。ここはどこだ」

シーナがラセツを状況確認の相手役に選んだのは、彼が比較的冷静さを保っているように見えたからだ。反りが合わないのは重々承知だが、そうも言っていられない。今必要なのは冷静に話し合える相手だ。

「ふん。そんなもの自分で確認してみればいいだろう」

「あ、それもそうか」

各プレイヤにはワールドマップを表示させ、自分の座標を確認できる機能がデフォルトで与えられている。基本メニューのウィンドウを開くところまでやっておいてそれをすっかり忘れていた辺り、自分は思っている以上に冷静ではないらしい。

仮想コンソール呼び出し、操作。ワールドマップを表示させる。

「魔法王国シスト＝オージェ？」

シスト＝オージェは魔法王国の名の通り、魔術師（スペルユーザー）系のクラスには何かと便利な街だ。中世ヨーロッパを模した街が多いＥＭでは珍しく異国情緒あふれるアラビア風。ここからなら『異界の門』も近い。

さらに街の詳細マップを表示させ、自分の位置を確かめてみる。

「迎賓館！？」

シーナは思わず目を丸くした。

そこはシスト＝オージェの中で最も大きな建築物でありながら中に入る方法がなく、何らかのイベントが用意されているのだろうと予想されている場所だった。その外観からついた通称が、迎賓館。ここである。

「こんなことでここに入ることになるとはな」

何となく苦笑してしまう。

「ラセツ。ラセツも実験とやら参加しろって言われたのか？」

「ああ。ログイン中にいきなり何もないところにつれてこられて、わけわからないオブジェクトにそう説明された。多少の質問は受けつけてくれたが」

「わけのわからないオブジェクト、か」

思案に一拍。

「で、ここに閉じ込められてる間、現実じゃどうなってるって？」

「表向きには、アクセスユニットの予期せぬトラブルで復帰不能に。現在、シス＝ロの技術者が全力で解決に当たっている、という筋立てらしいな」

「あたしもだいたい同じね。悪意のある人間がわたしのデータに手を加えて、ログアウトできなくしてしまったってストーリィ」

シーナの横にきていたアラシャがラセツに続く。さらには赤い女もいたが、彼女は口を開かなかった。寡黙な性質らしい。とは言え、取り立てて主張をしなかったのを見るに、どうやら前のふたりに近い経緯と理由が用意されたのだろう。

「シーナは？」

「俺も似たようなもんさ」

皆それぞれむりやりにここに閉じ込められ、表向きの体裁は整えられているらしい。２０人という人数にも納得がいく。この程度なら運営側が組織的にフォロー――この場合は金と生命維持環境の確保、があれば家族はしばらくは黙らせることができるだろう。

本来ならば、周囲の人間がＶＲアクセスユニットを無理にでも外してしまえば復帰できるはずなのだが、そこは『仮想現実とのリンクが強くなり過ぎて昏睡に近い状態にある、強引な手段をとると命に関わる重大な障害を引き起こす危険性がある』とでも説明しているのだろう。実際、初期にはそういう事例もあった。

「まったく、ふざけている。いったい誰がこんな真似をしたんだ！？」
「枸橘（カラタチ）由貴（ユキ）博士だよ」
興奮と苛立ちを抑えきれない様子のラセツの横で、シーナはさらりとその名を口にした。それはずっと頭にあった名前だった。

「からたち……？」
首を傾げるアラシャ。
しかし、意外にもラセツの反応は違っていた。

「枸橘博士！　そうか、枸橘博士か！」
「なんだ、知ってたのか」
「当たり前だ。理系学問を修めるものなら、絶対に一度は耳にする名前だ」

ラセツの言う通り、その業界に身をおくもの、興味をもつものにとって、枸橘由貴の名は避けて通れないものだった。
シーナもまたそのひとりだ。幼いころからゲーム好きで、ＥＭも発表直後のクローズドベータから参加して、遊び尽くしている。そして、成長とともに情報技術や情報工学の方面に興味と才能を発揮し、その過程で彼女の名前に当たったのだった。

程なく知る。その名前は禁忌と同意である、と。

「どんな人？」
「ひと言で言えば、天才だよ」

シーナはかいつまんで説明をはじめた。

枸橘由貴博士。

３０才。
専門は、情報工学と仮想現実。
現在普及している技術のいくつかは、彼女の気まぐれの産物だと言われている。

「気まぐれ？」
「ああ。博士は成果物をかたちに残すことがほとんどないんだ」

知識の入力と蓄積は８才でほぼ終了。その後から取りかかった研究は、その多くを自己の中で完結させていた。ただ、時折気まぐれに出力してみたり、企業に必要なデータを提供させた見返りに研究成果の一部を与えることがあった。それが科学技術を発展させたのだという。
故に、『彼女の研究成果があますことなく世に出れば、世界は後３度は脱皮するだろう』と実しやかに囁かれていた。

「ねぇ、さっき博士の専門が仮想現実だって言ったけど、もしかしてさ……」
「その通り。２０年ほど前、博士が１０か１１のときに組み上げた理論が、今のＶＲ技術の基礎になってる」
「うへぇ」

そうやって世界は、特に情報技術の面で、枸橘博士の研究の恩恵に与りながら成長してきた。

その後、彼女は１６才のときに女児を出産した。

「天才博士にもそういう相手がいたんだ」
アラシャは少女らしく、夢見心地にそう口にする。
「どうだろうな」

対するシーナは少し冷たい口調だった。

枸橘博士は女児を産み落とした後に言ったのだという。「今後の参考にと思い、ひとつの生命を誕生させてみましたが……あまりにも非効率的です」と。

それから程なく、彼女はその子を残して姿を消すことになる。

そして、その際、ひとりの男が死亡していた。

「目下のところ、博士は最重要容疑者だ。殺したから逃げたのか、去るついでに殺したのかは不明だけどな。ひとつわかっているのは死んだ男が、その子どもの父親らしいということ」

「やけに詳しいな」

ラセツが口をはさんだ。

確かにこれは闇に葬られた事件だ。最重要容疑者が若き天才研究者であり未成年、しかも、各方面から圧力がかかったらしく、第一報が流れた後はぱったりとメディアで触れられなくなった。

「……こんなものちょっとアンダーグラウンドなところまで潜れば、いくらでも情報は出てくるだろ」

これ以後、科学の世界では枸橘由貴の名前は禁忌となった。

「で、姿を消した博士はどこに行ったの？」

尤もな質問だ。

以後の枸橘博士は、おそらくどこかの企業か研究機関に匿われているだろうというのが大方の予測だった。

「企業のほうはやっぱり気まぐれな見返り目当て？」

「少なからずそういう下心はあるだろうけどな」
シーナは否定しない。
「私がその立場なら見返りなど求めないな。博士の役の立つだけでも幸せだ」
「うわ。あんた博士の信者なの？」
堂々と言い切ったラセツに、アラシャが一歩引く。
「いや、そう考える人間は少なからずいると思う」
枸橘博士が殺人事件の重要参考人として国家権力から追われる身であり、もしかすると本当に人を殺しているかもしれないと知りつつ匿い、無償で研究環境を提供する企業があってもおかしくはない。枸橘由貴とはそれほどのカリスマ性の持ち主なのだ。
「5年ほど前からはシス＝ロにいるんじゃないかと噂されていた」
シス＝ロ。正式名称はシステム＝ロゼッタ。全感覚接続型仮想現実を本格的な実用化にこぎつけ、ＶＲＭＭＯゲーム『エンゲルスマネーヴァ』を開発した企業である。
「どうして？」
「考えてもみろ。二世代も三世代も先をいってるような全感覚接続型仮想現実なんてシロモノ、枸橘博士以外に誰が扱える？」
「ああ」
納得するアラシャ。
シーナが言った5年前とは、全感覚接続型仮想現実の本格的な実用化と、それを利用したＶＲＭＭＯゲーム『エンゲルスマネーヴァ』が発表されたころでもある。その最先端と言うにはあまりにも超科

学的に過ぎる技術に、当時から枸橘博士の関与が噂されていたのだ。

「きっと博士は最初からこの『実験』をするために、シス＝ロを利用したんだろうな」

いや、もっと言えば『エンゲルスマネーヴァ』の稼動と同時に実験ははじまっていたのかもしれない。ＥＭのフィールドのすべてが壮大な実験演習場なのだ。そして、その実験が次の段階に入り、シーナたちがピックアップされた。――むしろそう見るべきだろう。

「でも、いったいどんな実験を？　ＥＭの新システムのベータ版テスト、とかじゃないよね？」

「当たり前だな。博士の興味はＥＭにはない」

そう発音して言葉にしたのがきっかけになったのか、少しずつ考えがまとまってくる。

では、なんだ？　重要なのはおそらく、仮想現実の中で人間が擬似的にであれ”生きている”ことだろう。

ＶＲ空間の中のプレイヤ・キャラクタは現実の人間に比べ、人体を模しつつもかなりの機能が省略されている。例えば、まず内臓が存在しない。心臓は致命的なダメージを受ける急所（ウィークポイント）として設定はされているが、実際に血を循環させている器官があるわけではない。従って、血も流れていない。呼吸はするが肺はないので、あくまでも擬似的な運動に過ぎない。人としてあまりにも不自然だという意見から、後でつけられたかたちだけの機能だ。

つまり、プレイヤ・キャラクタは現実の人間からいくらか次元を落とした状態にあり、その点が枸橘博士にとって都合がよかったのだろう。新薬の実験をマウスからはじめて、ついには人間に近いチ

ンパンジーで行うようなものだ。

しかし、ネックは肉体的な成長、変化が絶対に起こり得ないという点である。

一方で、精神的な変化は観測できるはずだ。ただでさえＶＲ技術のメリット、デメリットを語る上で脳や精神への影響という問題は避けて通れないのだ。この極限状態は恰好の素材かもしれない。

……いや、違う。

シーナはすぐにその考えを棄てた。博士が、これが心理学的な実験ではない言っていたのを思い出したからだ。

「……」

そこまで考えたところで、天才ならざるものの限界だった。

そもそも当の枸橘博士ですら、言葉というツールを用いて表現することをしようとしなかったのだ。考えを言葉にするというシークエンスを省略している可能性がある。それをシーナが予想できるはずもない。……尤も、多少の仮説がないでもないが。

と――、

「話は聞かせてもらったよ。なるほどなるほど」

意見を交わすシーナたちのところに、男がひとりやってきた。金髪の、いかにも美青年といった容姿だ。

ＥＭではキャラクタ作成の際、容姿はランダム生成されるのだが、不思議とどこかユーザーの面影を残すという特性があった。これについてはＶＲアクセスユニットが脳の情報を参照するか、容姿その

ものをスキャンしているのではないかという噂があったが、システム＝ロゼッタからは偶然の一致と公式の回答が出されている。

しかし、ＶＲアクセスユニットが脳に対して読み込みをかける、というのはあり得るかもしれない――と、シーナは思っている。

『全感覚接続型』といっているが、実際にアクセスしているのはシステム側だ。システムが脳に擬似信号を送り――精密なポリゴンの街並みを見せ、喧騒を聞かせ、石畳の感触を与え――そうやってあたかも架空の世界を歩いているように錯覚させているのだ。意識が別の世界に行っているわけではない。あくまでもアクセスのベクトルはシステムからユーザーへ。ならば、ユニットが脳の情報を読み取っていてもおかしくはない。

とは言え、この男の場合はオプションサービスを利用して、キャラの顔に手を加えたのだろうと容易に想像がついた。それもずいぶんと金を費やしたに違いない。

「ヴォルフガング……」

そう口にしたのはアラシャだが、そこにはあまりよい感情が含まれていないようだった。

シーナもその気取った名前には聞き覚えがあった。

キャラクタのクラスは、最上位の十字騎士（クルセイダー）。レベルももう間もなく最大に達しようかという、ＥＭ中でも２０本の指に入る猛者だ。しかし、彼を最も有名たらしめているのは、彼の持つ高価な装備品の数々である。きわめてレアで高価で高性能なそれは、特定のボスクリーチャーを倒したときに低確率でドロップされるものばかりだ。つまり彼は、実力と運を兼ね備え、膨大なプレイ時間を費やしているということになる。

「ヴォルフガングさん、何がなるほどなんだ？」
代表してシーナが問う。
「『ボ』じゃなくて『ヴォ』」
「は？」
「発音だよ。『ボルフガング』じゃなくて『ヴォルフガング』。人の名前は正しく発音してほしいな。これだから日本人は『V』の発音ができないって言われるんだ」
「……」
なるほど、と全員が納得した。確かに日本人はその発音が苦手らしい。彼の発音を聞けば、そのことがよくわかる。そして同時に、そのくせ『V』を使いたがるところも、この人種の特徴なのかもしれない。
「それは悪かった。じゃ、ヴォルフガングさん、続きをどうぞ」
シーナはできる限り忠実に発音したつもりだったが、それでも期待には応えられなかったようで、彼はふんと鼻を鳴らしてから話ははじめた。
「いったい誰がこんなことをしたのかと思ってたけど、高名なセンセイだったわけだ。つまりこれはそのセンセイが仕掛けたイベントなんだろ？」
「イベント？」
シーナは問い返しながら、眉をひそめた。この男は今の状況をわかっているのだろうか。ログアウト不能だというのに。
「いや、まったく、光栄なことじゃないか」
ヴォルフガングは芝居がかった動作で両手を広げ、続ける。

「僕たちは選ばれたわけだ。ＥＭのトッププレイヤとして」
「水を差すようで悪いんだけど、あたしたちあんたほどヘビィユーザーじゃないわよ」
　呆れた調子のアラシャ。それでも彼女は言葉を選んだようだ。こういう場合はたいてい廃人ゲーマーといった単語が使われる。オンラインゲームのために実生活を犠牲にした人種という意味だ。
「そ、それは、まぁ……実験だから？　幅広いレベルから選んだんだろうさ。もちろん、僕はトップに君臨するプレイヤとして見込まれたのは間違いないだろうけど」
　彼は自慢げに鼻で笑う。
「なかなかどうして、いい目のつけどころじゃないか。あんな無機質なオブジェクトを通してクエストを伝えてきたのは気に喰わないが、それくらいはおおめに見るとしよう」
「じゃあ、何か、あんたはこんなわけのわからない『実験』とやらにつき合うつもりなのか」
「当然じゃないか！」
　逡巡なしの断言。
　ヴォルフガングは興奮した調子で次句を継ぐ。
「これこそ正しく現実と仮想現実の境界を越えたイベントだ。負けたら死ぬし、勝てば望むものが手に入る。どうせ現実（リアル）なんて面白くないことばかりなんだ。だったら、仮想（バーチャル）で命を賭けるほうがよっぽど楽しいじゃないか。君たちだってＥＭのプレイヤとしてそう思うだろ！？」
「……」
　思うかよ――シーナたちはそろってそう思ったが、呆れて誰もそれを口にはしなかった。

そんな空気など毛ほどにも感じた様子はなく、ヴォルフガングは振り返ると大広間を見渡し、声を張り上げた。
「聞いてくれ、みんな！」

そのひと言で意味のない破壊活動をしていたものも、中身のない口論をしていたものも、いっせいに注目した。皆の視線を集めながら彼は長いテーブルの端へと移動する。まるで演壇に立つ演説者だ。

「我々がここに召喚された理由は、すでに皆知っていると思う。ならばやることはひとつだ。……やれと言うならやってやろうじゃないか。『異界の門』の攻略を！」

だが、その提案に誰もすぐには答えようとしなかった。ただただ近くのものと顔を見合わせるばかり。当たり前だ、とシーナは心の中で吐き捨てる。『異界の門』の悪評を聞いたものならあれが攻略可能だとは思うまい。あそこはそういう場所だ。

それでもヴォルフガングは続ける。
「何を迷うことがある！　この僕が、ＥＭのトッププレイヤであるこの僕がいるじゃないか！」
彼は力強く拳を振り上げた。
そこに実体化（データロード）されたひと振り剣が握られている。過剰なまでに装飾の施された剣だ。

その名を、聖剣デュランダルという。
直剣カテゴリの中で最高位に位置し、このゲームの中で存在できる数の上限が定められているのではないかと囁かれるほどレアな装備だった。そして、それこそがヴォルフガングをトッププレイヤの一角を担わせているものでもある。

彼はただ単にそれを見せることで自分の力を、存在を誇示したかっただけなのかもしれない。だが、図らずもその行動は、結果的に彼の言葉に説得力を持たせることとなった。

「そ、そうだ。その通りだ！」

誰かが声を上げた。

「それにここには２０人もいるんだ。むりなことはないはずだ」

「俺だって伊達に３年もやり続けてるわけじゃない」

次々に上がる賛同の声にシーナは唖然とした。それは打開策のない絶望的状況で、唯一示された案を正解だと錯覚して飛びついているだけだ。

「ま、待て――」

「いや、一理ある」

そのシーナの言葉に割って入ったのは、彼の隣にいたラセツだった。

「ラセツ！　お前まであんな案に乗るつもりなのか！？　あそこがどんな場所か知らないわけじゃないだろう」

『異界の門』。

そこはあまりにも評判が悪かった。配置されているクリーチャーは軒並み高レベル帯で、湧出（ポップ）のペースも速い。確実に息つく間もない連戦を強いられる。開発スタッフが設定を間違ったのだと誰もが口を揃えて言っている。しかも、一歩入ればプレイヤがプレイヤを攻撃する、いわゆるプレイヤ殺（PK）しが許されているある種の無法地帯ときているのだ。

「だが、我々が生きて外へ出るには、あそこを踏破するしかない」

「探せばいいだろ、他に手を！」

何も馬鹿正直に言うことを聞いてやる義理はない。落ち着いて探せばいいのだ、この仮想現実から脱出する方法を。あんなゲームバランスの狂った地下迷宮に挑むなどナンセンスだ。

だが、ラセツは冷ややかに問う。

「枸橘博士がそんなものを残していると思うか？」

「……」

シーナは言葉に詰まった。

ない、だろう。

あの枸橘由貴博士が実験を行うと言ったのだ。ならばその環境は非情なまでに完璧に整えられているに違いない。ましてやそこに彼女の不備による抜け道があるとは思えない。しかも、絶望的なことに運営会社であるシステム＝ロゼッタまでがこの実験に協力しているのだ。多少小細工を弄したところで潰されるのがオチだろう。

彼はさらに続ける。

「それこそここには２０人ものプレイヤがいる。試してみる価値はあるはずだ」

確かにこんな大規模パーティはよほどのボスクラスのクリーチャーを狩るときでないと組まれないだろう。しかも、どうやら中にはヴォルフガングほどではないものの、高レベルのプレイヤもいるようだ。

枸橘博士の実験に協力したいわけではないだろうが、あくまで正攻法による仮想現実からの脱出を主張するラセツ。確かにその選択は正しいのだろう。だが、自ら罠に飛び込んでいくような不安がど

うしても拭い切れない。

見れば大広間はヴォルフガングを中心に、今にも『異界の門』へ突入しようかという勢いで盛り上がっていた。

彼らにとっては自分たちの生命がかかった死の実験も、単なるゲーム内のクエストに成り下がったようだ。ゲーマーらしい高い適応力というべきか。だが、それを鼻で笑って傍観者を気取っている場合ではない。シーナも彼らと立場を同じくする運命共同体なのだ。流れがこうなってしまった以上、自分も同道することになるだろう。

「……」

気が進まない。いや、それどころか恐怖すら感じている。

このまま黙って枸橘博士の掌の上で踊らされていいものか。それは与えられたデスゲームの舞台に、自ら進んで上がる愚かな行為ではないだろうか。

しかし、他に手がないのも事実だ。

どうやら否が応にも、この死のクエストに参加せざるを得ないらしい。

ならば頭を切り換えろ――シーナはまたも自分に言い聞かせる。『異界の門』を踏破するしか現実へ戻る術がないというのなら、もう腹を決めるしかない。ここにいるプレイヤたちと協力して何としても生還を果たす。よくも悪くも、皆を焚きつけてくれたヴォルフガングには感謝するべきかもしれない。

だが。

この時点では誰も――おそらくこの中で最も深刻に事態を受け止めているシーナですら、この『実験』の本当の怖さを理解していなかったと言えるだろう。

4．賽は投げられた

誰もが息を切らしていた。

しかし、この『エンゲルスマネーヴァ』において疲労というシステムはない。その気になれば敏捷性値から算出される最大速度を維持したまま、体力値によって決まる持続時間の限界までひたすら走り続けることができる。にも拘らず、皆が皆、疲労していた。そうさせるもの――それは緊張だった。

際限なく湧き出るクリーチャーとの連戦。
敵はこちらが体勢を整えて初めて戦闘に突入する親切なものばかりではない。積極的にターゲッティングしてくるもの、果ては不意打ち（ズアタック）をしてくるやつまでいる。索敵に失敗すれば、それだけで大ダメージを被りかねない。

そして、もうひとつ。
誰も口にしようとしないある制約――。

それらがここにいるすべてのプレイヤに、通常ではあり得ないはずの息切れを引き起こさせるまでに、極度の緊張を強いていた。

今、シーナたちは扉の前にいた。

この『異界の門』はよくある天然の洞窟ではなく、石造りの神殿のような人工の迷宮だ。ここにくるまでにもいくつかの扉を通っている。だが、今目の前にあるのはこれまでのものとは違い、レリーフを刻まれたひと際豪奢な扉だった。

「たぶんここが最後ね」
アラシャが仮想コンソールを操作し、オートマッピングされたこのフロアの地図を展開した。拡大表示させ、全員に見せる。
正方形に近い地図はほとんど埋まっていて、唯一の例外は真ん中にぽっかりと空いた5ブロック四方の空間だった。扉はその南の中央に位置している。この向こうに地図の空白地帯と同じだけの玄室（チャンバー）が広がっているのはまず間違いないだろう。
「よし、準備だ」
ヴォルフガングの声は出発前ほどの勢いはなくなっているが、慎重さを増した分だけ皆の気を引き締めた。
まずは持ち物を確認する。戦闘中に必要になりそうな消耗品――HP回復のポーション類や、毒・麻痺などのバッドステータス解除のアイテム類は所持品トレイから装備品トレイへ。これですぐに使うことができる。
魔法の効果も再度見直す。防御力・抗魔力の上昇やバッドステータス対策の魔法で、予めかけておけるものはすべてかけておく。すでにかかっていて持続時間が半分を切っているものは、思い切って上書きをしてしまうことにした。
「行くぞ……！」
号令をかけるのはやはりヴォルフガングだった。彼は全員を見回し、準備が整ったことを確認すると、最後の玄室につながっているであろう扉に手をかけた。力を込めたのは最初のひと押しだけで、後は自動で開いていく。
中に広がっていたのは暗闇だった。

通常、この手の玄室では中と外とで別空間として処理される。外からいくら目を凝らしても中を窺うことはできず、足を踏み入れて初めて情報が与えられる。パーティは中に入った途端、暗闇に包まれた。当然、前述のようなシステムの関係で、そこに扉があっても外から光が差し込むことはない。

「暗闇地帯（ダークゾーン）か？」

「誰か、光の魔法を」――指示が飛ぶ。暗闇地帯は周囲を照らす光の魔法があればそれだけですむ仕掛けだ。

「それに――」

――不意打ち判定（サプライズアタック・チェック）……

「何もいない、のか……？」

と、そのときだった。

「床！」

鋭い女の声で、皆いっせいに足もとを見た。自分の足先が辛うじて見える程度の闇の中、そこに幽かに赤い色で複雑な文様が描かれつつあった。

魔方陣だ。

――魔法・”災禍の炎”／発動／判定（ロール）……

気がついたときにはもう遅かった。魔方陣が完成し――瞬間、吹

き出した猛火が一行を襲った。
「ぐおっ」
「熱っ」
口々に悲鳴が上がる。

シーナも「くっ」と奥歯を噛み締め、思わず腕で顔を覆った。しかし、所詮はゲーム。感じた痛みも熱もたかが知れている。吹き出した炎は、可燃性の気体に引火したときの現象ように、一瞬で消えた。どうやら不意打ちで火炎魔法を喰らったらしい。

削られたＨＰはシーナで２割程度。一回の攻撃で受けたダメージとしては過去最大だ。

不意に玄室の内部が明るくなった。やはり室内はこれまで通ってきた道と同じく石造りだった。そして、シーナたちが入ってきた南の扉とは反対側、北側の壁を背にしてそいつはいた。

襤褸をまとった骸骨の体。左手には開いた羊皮紙の書物。ネームタグを確認する。――《Ｔｈｅ　Ｌｙｃｈ》。

屍導師（リッチ）。
知識と引き換えに悪魔に魂を売り渡した魔導の研究者――。

「あれがこのフロアのボス……」
「みたいだな」
緊張が走る。あれを倒さねばならないのだ。

「怯むことはない。敵は一体だけだ！」
ヴォルフガングの勇ましい掛け声に、皆、近くのものと顔を見合わせ、うなずき合った。

いっせいに、セオリィ通りに動き出す。

戦士、剣士、騎士といった前衛クラスが武器による直接戦闘を仕掛ける。特に良質の装備で身を固めているヴォルフガングや防御力の高いラセツは正面から向かっていき、シーナのように技と速さを重視したタイプは死角から攻めにかかる。

同時、魔術師（メイジ）や僧侶（クレリック）といった後衛クラスが魔法を使う。先ほど受けたダメージの回復と、抗魔力のアップだ。

対ボス戦がはじまった。

直接打撃の臨場感溢れる効果音が重なるように響き、エフェクト光が絶え間なく閃く。魔法の発動を示す魔方陣がそこかしこに描かれた。

ひとつ、皆の気を大きくさせていることがあった。それは全員で戦えるということだ。

迷宮内の通路はあまり広いとは言えず、一度に戦えるのは前衛後衛それぞれ３、４人が限界だった。よって、その構成のパーティを前に歩かせ、背後からの攻撃に備えてもう１パーティを最後尾に置くという布陣でここまできた。尤も、それだからこそローテーションを組むことで連戦に継ぐ連戦をしのげたとも言える。

だが、ここなら全員が戦闘に参加できる。

２０ｖｓ１。

めったにない大規模パーティだ。

これなら勝てる――誰もがそう思っていた。

その瞬間までは。

屍導師が、骨だけの手を振った。

また範囲攻撃魔法が繰り出されるのだと思い、身構えた。だが、場に目立った変化は現れなかった。

「あれ？　何だこれ？」

「お、俺もだ」

怪訝そうに発音をしたのは、ダメージを受けて中途半端な位置まで下がっていた前衛クラスのふたりだった。見れば体に情報量の多い複雑な魔方陣が描かれつつあった。これまで攻撃魔法一辺倒だったこともあって、何が起こるのか見守ってしまった。バッドステータスの付与か、能力値ダウンか。

しかし、それが悪かった。

――魔法・”　　”／発動……

魔方陣の完成、つまり魔法が発動した瞬間。

「ぐっ」

「がっ」

ふたりは短いうめき声を上げると、身を仰け反らせ、空を掴もうとするような構造で動きを止めた。

一拍。

そして直後、水飛沫にも似た音を伴って、まるで繊細なガラス細工が砕けるが如く、ふたつの現身（アバター）が跡形もなく飛び散った。

「えっ？」

異口同音に驚愕の声がもれた。

放たれた魔法は確かにバッドステータスを付与するものだったらしい。最悪のバッドステータス――即ち、死だ。

戦闘中にも関わらず、場を奇妙な沈黙が支配した。

「し、死んだのか……？」

誰かがおそるおそるその疑問を口にした。

死んだといえば死んだのだろう。問題はその死に方とそれが意味するところだ。普通なら死んだプレイヤの現身はステータスを《Ｄｅａｄ》にして、一定時間その場に残る。蘇生魔法を受けつける猶予だ。勿論、その可能性がまったくないなどの理由で、即座に死亡を確定させて、セーブした街に戻ることも選択できる。

だが、どちらにせよ今のような現象は初めてだった。異常と言ってもいい。

それだからこそ、その可能性を想起させた。

それはここにいるものたちにだけ課せられた、おおよそゲームとは思えない制約。ここにくるまでに極度の緊張を強いた見えない重圧（プレッシャ）の元凶。

つまり――仮想現実での死＝現実での死。

しかし、それは今に至るまであくまでも疑問符つきだった。先の異常な現象が証明したようにも見えるが、それを確かめる術はない。

「お、おい。まさか本当に――」

「みんな動くんだ！」

シーナは叫んだ。咄嗟に発音を遮ったのは、それを最後まで言わせたくなかったからだ。

「まだ戦闘中だぞ！」
しかし、それでも動けたのは半分にも満たなかった。呆然としているもののほうが多い。
「どうするんだ、シーナ！？」
ラセツだ。彼も動けたほうのプレイヤだったようだ。
「やられる前にやるしかない！」
視界直接表示の簡易ステータスを見れば、敵のＨＰはすでに半分を切っている。
「即死魔法はここにきてやっと出してきたんだ。連発するアルゴリズムにはなってないはずだ」
「……もしまたきたら？」
「中断（インタラプト）効果のある攻撃を浴びせかけてカットを狙う」
攻撃や魔法、スキルなどのアクションの中には中断（インタラプト）の付加効果を持つものがある。それが発動すると、喰らったものは準備中のアクションがキャンセルされるのだ。シーナはあの即死魔法を防ぐにはそれしかないと考えていた。幸いにして、即死魔法はその絶大な効果に比例して情報量が多く、複雑になった魔方陣は描画に時間がかかる。ただし、中断効果は発動は絶対ではなく、むしろ確率は低いほうではあるが。
「それしかなさそうだな」
忌々しげに吐き捨てるようにそう言うと、亜麻色の髪をした貴族顔の美丈夫は、重戦車の如く屍導師に突進していった。
「アラシャも頼む。隕石でも何でも遠慮なく落としてやれ」
「伝説の大魔女（ソーサレスクイーン）エステル様じゃあるまいし、そんなことできるわけないでしょ……！」

言いつつも金髪の美少女はすでに魔法を撃つ体勢に入っていた。
頭上にかざした手のその手首の周りに魔方陣が描かれ、完成と同時に振り下ろす。

――魔法・”雷光矢”／発動／判定……

アラシャの指先から数条の稲光が迸り、狙い違わず屍導師を撃った。

さて――と、シーナは最も頼りになるはずの男に振り返る。
「おい、ヴォルフガングさん」
「な、なんだよ」
その男は立ち竦むばかりで、シーナの声にも怯える始末だった。

「即死回避の護符とかは持ってないのか？」
「も、持ってるわけないだろっ。あれは重いんだぞ。僕のこの装備が持てなくなるじゃないか。だいだい普通あんなのに当たったらギャグだろ。対策なんてどんだけチキンなんだよ」

彼の言うことにも一理ある。実際、即死効果を持つ攻撃や魔法などどれも成功率は低いもので、キャラの抵抗値を加味すれば確率は確実にひとケタ台だ。それに当たったとなれば、もはや自虐ネタにするレベルだと言われている。わざわざ重量負荷（エンカンブランス）の大きい即死回避の魔法具（アーティファクト）を持ち歩くものなど皆無だ。

「じゃあ、その自慢の装備ならどうだ？　全属性に抵抗があるんじゃないのか？」

「僕にわざわざ的になりにいけっていうのか！？　冗談じゃない！」
ヴォルフガングはヒステリックに叫ぶ。
「それにあれがこんなもので防げるのかよ！？」
「……」
シーナは黙り込んだ。それは考えないようにしていたことだった。

問題はそこなのだ。
前述した通り即死効果の判定は極めて低い。にも拘らず、ふたりが同時にそれを喰らって命を落とした。果たしてこれはシステムの公正な演算の末の天文学的な偶然なのか、それともそれが屍導師のボスクリーチャとしての能力なのか。もし後者だとしても不思議ではないのかもしれない。この『異界の門』自体がＥＭにおける、正しく異界なのだから。

「……わかった。もういい。悪かった」
シーナは絞り出すようにそう発音し、ヴォルフガングに背を向けた。確かに不確定要素の多いこの状況で、囮役を押しつけるのはあまりにも酷というものだろう。

目の前では戦闘が続いていた。
参加している人数は最初の半分。だが、その戦いぶりには鬼気迫るものがあった。当然だ。命がかかっているのだから。シーナも倒すべき敵を見据え、駆け出した。

屍導師の前面と左右に壁のようにみっつの魔方陣が描かれ――と同時に、炎が噴き出して、群がるプレイヤたちを薙ぎ払った。そこにシーナが飛び込んでいく。
「ふっ」
呼気とともに達人（マスター・カタナ）の刀が閃き、派手なエフェクト光を散らした。

前衛がシーナを中心に体勢を立て直す。
やがて屍導師のＨＰは削られていき――それが３割を切ったそのときだった。

骨の手が振られた。
即死の魔法。

「い、嫌だ！　死にたくない！」
「俺かよ！？」
選ばれたのは中距離から矢を射かけていた狩人（ハンター）の男と、短槍（ショートスピア）を２本持った戦士だった。体に魔方陣が描かれつつある。完成したときが最後だ。
緊張が走る。

「誰か！　誰でもいい、カットだ！」
叫ぶシーナ。

刹那、その横を何かが駆け抜けていった。

それは中衛として主に陽動とかく乱の役をしていたあの盗賊（シーフ）の女だった。
赤い疾風と化した彼女は、一気に屍導師の懐に飛び込んだ。左右の手には短剣。

――短剣技・”二刀八連”／追加効果”中断”／発動／判定……

２本の短剣が高速で屍導師に襲いかかった。１回、２回、３回…

…。剣閃が刻まれるたびに、エフェクト光が飛び散る。そして、7回目の斬撃の際、ひと際大きな効果音と色違いの派手なフラッシュが起こった。

同時、狩人と戦士の体から、もう間もなく完成しようとしていた魔方陣が霧散した。

中断効果だ。

即死魔法がキャンセルされる。

「た、助かった……」

と、戦士の男。狩人のほうは言葉も出ない様子で、腰が抜けたようにへたり込んでしまった。

シーナもほっと胸を撫で下ろした。もう現身がガラスのように砕けて散る、あんなぞっとする光景は見たくはない。

と、

一旦途切れた斬撃の音が、再びシーナの耳朶を打った。

――短剣技・”二刀八連”／連続発動／判定・成功

――短剣技・”二刀八連”／連続発動／判定・成功

――短剣技・”二刀八連”／連続発動／判定……

女盗賊が休むことなく技を繰り出し続けていた。ゲームシステムからのアシストがあるとは言え、おそろしい勢いだ。

――このまま一気に削り切るつもりか！？

すぐにその意図はわかった。だが、所詮は筋力値の低い盗賊の短

剣技。ダメージ量はそう多くないし、スキルの連続発動には成功率にマイナス修正がかかる。いずれ手は止まるはずだ。

「助けてもらった借りは返すぜ！　俺がいく！」

どこか陽気な響きを含んだ声は、先ほど即死魔法のターゲットになっていた戦士のもの。彼もまた瞬時に意図を察した上、行動に移ったようだ。

双槍の戦士が屍導師に迫る。

短槍を2本持ち、身を低くして疾駆する様は、獲物を狙う怪鳥のようだった。

「代われ！」

その声を合図に女盗賊が流れるような動きでその場を離れ、戦士へとスイッチした。

――槍技・”三連刺突”／発動／判定……

まずは右で踏み込み、短槍で3段突き。突き攻撃用の穿つような効果音と、小さく鋭いエフェクト光がみっつフラッシュした。

「もう一丁！」

――槍技・”三連刺突”／連続発動／判定……

さらにもう一歩、今度は左の短槍で3段突きを繰り出す。さすが前衛クラスというべきか、これだけで盗賊の短剣技『二刀八連』4

発分に相当するダメージだった。

そのときにはシーナも、そして、ラセツも動き出していた。

剣士と重戦士が二者二様の走りで屍導師に迫り――達人（マスター・カタナ）の刀と長柄（ルバード）戦斧が、左右からほぼ同時に襲いかかる。

「はっ」

「ふんっ」

そこから戦いは乱戦の様相を呈しはじめた。

直接攻撃と攻撃魔法でダメージを与え、受けたダメージは回復魔法で回復させる。一方の屍導師は回復手段がないので、後はいかにして犠牲を出さずに敵のＨＰを削り切るかの戦いだった。

故に――勝敗の見えた戦闘の中で、それはボスクリーチャーの最後の足掻きだったのかもしれない。

三度、即死魔法が放たれた。

「！？」

シーナの体に死の宣告を意味する魔方陣が描かれ出した。

「い、いやあっ！」

後ろでは少女の悲鳴。確か後衛で補助と回復に回っていた僧侶がいたはずだ。声は彼女のものだろう。

シーナは周囲に目をやった。

２度目の即死魔法を見事防いでみせた赤い女と目が合う。が、彼女は無言と、かすかに曇った表情をもって首を横に振った。見れば手にした短剣は刃が砕け、柄だけになっていた。戦いの中で折れてしまったらしい。

彼女のカットは見込めない。

そして今、屍導師にいちばん近い位置にいるのはシーナだった。
決断は一瞬。
――だったら！
達人の刀の鞘を呼び出し、素早く納刀。
「シーナ！」
アラシャの悲鳴にも似た呼び声。
「カットできる技がないんだよ！」
それならば一か八か、このまま屍導師を倒してしまうしかない。
ＨＰは残り１割を切っている。最も大きなダメージが期待できる技で全損させてしまうほうが早い。いや、それが唯一無二の手だ。
これは賭けだ。
シーナは屍導師の前に躍り出た。
――体術・”踏み込み”／発動／判定・成功
――技巧・”早業”／連動発動／判定・成功
――達人の刀（マスター・カタナ）・”抜刀”／連動発動／判定・成功
石畳を砕く勢いで踏み込み、それに連動して高速の抜刀。
刃は鞘走りによって加速され――、
――スキル連動・成功！

「おおっ！」
裂帛の気合いがシーナの口から吐き出される。

――”居合い”／発動／判定……

抜き放たれた刃は、逆袈裟の剣閃を刻んで屍導師を斬りつけた。
多重の快音と、眩いエフェクト光。

シーナは勝利を確信して、敵の簡易ステータスを見た。

だが。
渾身の一撃は確かに一見して残りのＨＰを全損させたように見えた。だが、よく見ればゲージはわずかに残っていて、それを裏づけるように最大値の１％にも満たない数値がその下に示されていた。

ただの骸骨でしかないはずの屍導師の顔が嗤った気がした。

「……」
シーナは目を閉じる。

負けた。
賭けは失敗に終わったのだ。

もう間もなく即死の魔法が完成し、ＨＰの残量に関係なくシーナを死へ誘うだろう。そして、その後は――本当に現実世界においても死んでしまうのだろうか？

敗北感と悔しさはある。どちらも枸橘由貴博士に対してのものだ。
だが、それ以上に興味が尽きなかった。
現実の死はどのような技術によってもたらされるのか？　それは自覚できるのか？　死後の認識は？　――間もなく訪れる死を前にしてこのようなことを考えている自分は、思っていた科学の徒だったらしい。
そう思ってシーナはわずかに苦笑した。

と、そのとき。

「伏せろ、シーナ！」
「！？」
いきなり耳に飛び込んできたラセツの声に、シーナは何ごとかと確認するよりも前に咄嗟に身を沈めた。

直後、
「ぬぅん！」
ラセツの長柄戦斧が半瞬前までシーナがいた座標を、低く重い風斬り音を立てて通過していった。
無論、狙いは屍導師だ。

ラセツの一撃がとどめとなった。あるかないかのようなゲージは完全に削り取られ、数値も０へと変わった。屍導師は動きを止めて一拍――後、光に溶けるようにして霧散した。

玄室内を静寂が満たす。

「勝った、のか……？」

誰かのつぶやき。

シーナは立ち上がって、自分の体を見た。死を刻んだ魔方陣は消えている。いくつかの例外はあれど、術者（スペルユーザー）が消滅すれば効果に継続性のある魔法や、発動前の魔法も消える。勝ったことは疑いないようだ。

だが、それを素直に喜べない空気がそこにはあった。ふたりの犠牲を出したから？　いや、そうではないだろう。

不意に、重たいものを引きずるような音が響いた。

皆いっせいにそちらを見た。

玄室の北側、最初に屍導師が現れた辺り。そこにぽっかりと四角い穴が開いていた。奥に見えるのは下へと続く階段――。

――そうだ、これで終わりじゃない。ここからなんだ。

あれだけ必死になって、ふたりもの犠牲を出して倒した屍導師も、単にこのフロアのボスクリーチャーというだけで、目の前の階段を下りれば第2層があり、そこにはまた別のボスクリーチャーが待ち受けているのだろう。そうして何層あるかわからないその果てに、シーナたちの目指すゴールはあるのだ。

誰も動こうとはしなかった。先の戦闘で最後まで戦い続けた赤い女や戦士の男ですら、精神的に疲弊した様子で床に目を落としている。当たり前だ。こんな先の遠い、見えてもいない道に、誰が第一歩を踏み出せるものか。

しかし、それでも踏み出したものがいた。

「ラセツ！」
シーナはその名を呼んだ。
「……行くしかない」
彼は決意のこもった発音を返してきた。

「むりだ」
認めたくはなかった。言いたくはなかった。が、それでもシーナは血の塊を吐くようにその言葉を口にした。
「もしかしたらと思って俺もここまできた。だけど、もうむりだ。他の手を考えよう」
「それがなかったら？」
「……」

シーナとて本当にそれがあるとは思っていなかった。これはあの枸橘博士が己が研究のために用意した実験環境だ。どう考えてもそんなものが残されているとは思えない。

「そのときは、」
ならば。
「そのときは、強くなろう。俺も、お前も。今まで以上に」

この死のクエストを突破するために。そして、いつかあの女と対峙するために。それが自分の役目のはずだ。
シーナはようやく覚悟を決めた。

長い長いデスゲームのはじまりだった――。

第1章　了

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9959u/

機械仕掛けの神はダイスを転がす

2011年9月17日03時11分発行